

第六二回研究例会

三・一一 一年後から

はじめに

重信 幸彦

平成二四年三月十八日に、立正大学で実施した第六二回研究例会は、東日本大震災から一年がたったことをふまえた企画を具体化した。

といっても、例会委員会では、この時点で口承文芸学は如何に役に立つのか、といった大上段に構えたような企画をたてられる状況ではない、という感覚があった。直接の被災者でもない多くの本学会会員は、出来事の大きさを十分に捉えきれないながら、それぞれの場所で、なんとか向き合おうとしてきたというのが現実的などころではなかっただろうか。

そこで、研究報告というより、それぞれ異なった立場から「三・一一以後」という出来事に関わり続けてきた口承文芸学・民俗学の研究者の方々のお話を耳を傾けるという機会を持つことにした。以下に、第六二回研究例会の趣旨を記した案内文の一部を引用する。

「三・一一以後、私たちの多くが、未曾有の震災被害の直接的「当事者」ではないながらも、一方で「原発」という見えない脅威に対しては間違いなく「当事者」であるという、どこかで宙吊り状態にされたような「不安」「怒り」「諦め」など言語化しにくい感情を抱え続けています。

そうしたなかで、「伝承」「文学」「文化」「ことば」などを自らにとって抜き差しならない問いとして考え続けてきた私達は、現在も進行中のこの出来事にどのように向き合おうとしているのでしょうか。

今回予定している例会は、口承文芸研究や民俗学がいか「役に立つか」を大上段から問うのではなく、まだ長く続くに違いないこの「三・一一以後」という状況に、私たちが改めて「我が事」として向き合うための一つのきっかけを作ることを目的としています。

今回の震災で、国立歴史民俗学博物館がこれまで気仙沼で調査を続けてきた網元（尾形家）の家が、津波により流されました。歴博では、震災後の四月から、この「民家」尾形家に関わるモノを泥のなから拾い出す作業を続けてきました。

この作業に現在まで関わり続け、気仙沼に通っている国立歴史民俗博物館機関研究員・葉山茂氏のお話を耳を傾け、「そこ」で何が起こり、何が行われ、何が問われ続けている